年報　タイ研究　No.10, 2010　17－34.

【論 文】2

〈獲る〉海から〈見る〉海へ
── ワイルドライフ・ツーリズムによるリーフの観光資源化 ──

From “Fishing” to “Watching”: Utilization of Marine Creatures as a Wildlife Tourism Resource

市野澤　潤　平*
ICHINOSAWA Jumpei

Fishing has been a common use pattern of marine creatures (especially reef fishes) among local people on the Andaman Sea coast of Thailand. However, fishing opportunity for indigenous people has been decreasing due to not only expansion of proclaimed protected areas but also a considerable increase of international tourism revenue in the region. In recent decades a new pattern of utilizing marine creatures, namely wildlife tourism, has become to generate more economic benefits than reef fisheries. Wildlife tourism in the Andaman Sea, represented by scuba diving and snorkeling, can be simply defined as an activity of “watching” marine creatures rather than “catching” and “eating”.

Phuket, Thailand’s largest island, is often called as the pearl of the Andaman. Because of the government-led tourism development since the late 1970s, Phuket has become the South’s most popular tourist destination. The purpose of this paper is to describe a current situation of diving tourism around Phuket. The point of focus is utilization of marine creatures as a tourist attraction in the context of diving tourism. Through a description of everyday practices of diving guides in Phuket, the ways in which they entertain diving tourists are revealed. The paper presents an analysis of attitudes and behavior of both diving guides and tourists based on comparisons with small-scale fishing practices (including fish trap, hook-and-line, dive-fishing, and gill net fisheries) of local people in the southern part of Phuket Island. Some critical differences between “watching” and “catching” practices are found, which make it difficult for local fishermen to change their job to become a diving guide.

1．はじめに：観光資源化するサンゴ礁

海岸線に沿って分布する造礁サンゴの群生域と岩礁地帯（本稿では併せてリーフと呼ぶ）は、魚類をはじめとする多種多様な海棲生物の格好の漁場として、地域住民に生産活動の基盤を提供してきた。しかし現在、サンゴ礁の海に関しては一般に、漁業／漁撈（fishery）[1] によって得られる経済効果よりも、「観光／レクリエーション」[2] によって得られる経済効果のほうが大きくなりつつあるという、世界的な潮流がある [WWF ジャパン 2003]。かつては小規模な（そしてときに自給的な）漁撈活動の場であった熱帯から亜熱帯にかけての地先の海は、いまや国境を超えた市場に売り出す観光資源として、評価されるようになってい

*宮城学院女子大学

る。

リーフの観光資源化は、タイの領海においても急速に進行しており、観光の場としてのサンゴ礁の経済価値を高く見積もる推計結果が、タイ南部の海中国立公園に関しても提示されている[Udomsak 2001: 30]。それは、漁業においては外洋に比して周縁的な価値しか持たなかったリーフが、より広く捉えての経済価値に関しては相対的な重要度を増しているということでもある。海岸線に沿った非常に狭い（大半が100mにも幅が満たない）エリアであるリーフは、観光開発という新たな文脈のなかに置き直されることによって、零細漁民が細々と生業を営む場から、多くの国際観光客を惹きつける金の成る木に変貌したのである。

パタヤ、サムイ島、プーケット島に代表されるように、タイの海岸線においては1970年代以降、政府主導での観光開発が急速に進んだ。海岸域の観光開発は、長大な砂浜の後背地に宿泊や娯楽のための施設が集中立地するビーチリゾートを生み出す一方で、後述するように、ビーチに滞在する観光客が足を伸ばす楽しみの場としてのリーフの観光資源化を推し進めた。地形的な制約から波打ち際での水遊びには適さないリーフにおいて展開される観光活動は、主にダイビングとスノーケリングであるが[3]、その双方とも、海棲生物を不可欠の観光資源として成り立っている。色とりどりの熱帯魚をはじめとする豊かな海中の生態系を間近に見られるということが、ダイビングやスノーケリングが魅力的な娯楽として観光客に受け入れられる上での極めて重要な条件である。すなわち、漁民にとっては〈獲る〉対象であったリーフの海棲生物が、観光という文脈においては〈見る〉対象となるのである。野生生物との触れ合いを主目的とするという意味で、ダイビングやスノーケリングは「ワイルドライフ・ツーリズム」[Newsome *et al.* 2005] の一形態として捉えることができる。ワイルドライフ・ツーリズムは、海棲生物の〈見る〉利用の典型である[4]。

本稿は、タイにおけるリーフ観光の中心であるアンダマン海域（図－１）、なかでも最も多くの国際観光客を集める観光地であるプーケット島近海を事例として取り上げて、〈見る〉という新たな海棲生物の利用が、いかなる形で実践されているのかを、報告する。

図－１　タイ南部アンダマン海

タイ南部で最大の海洋観光拠点として発展してきたプーケットは、海棲生物の〈獲る〉利用から〈見る〉利用への転換の典型的な事例とみなせる。またプーケットは、観光開発が高度に進んでいる一方で、観光客を相手にする数多くの海鮮料理店を抱えて、リーフからの漁獲物の市場ともなっている。つまり、海棲生物の〈獲る（食べる）〉利用と〈見る〉利用が共存しているため、その二つの利用法を比較するために好適な事例でもある。

プーケット近海のラーチャーヤイ（Racha-Yai）およびラーチャーノイ（Racha-Noi）両島[5]を始めとする複数の離島の周辺は、プーケット南部沿岸に居住する人々による小規模な漁業の舞台であると同時に、プーケットを起点とする日帰り観光ツアーの主要な目的地のひとつとなっている。アンダマン海一帯におけるサンゴ礁を舞台する小規模漁業についての実証的なデータは、外海で展開される漁業に比べて乏しかったが、2006年にUkkrit & Kanlaya [2008] が、プーケット南部の漁民が行なっている漁撈活動についての聞き取りを行ない、その実態が報告された。本稿は、筆者自身が2006年から2008年にかけて調査した[6]、プーケットを起点とする日帰りダイビング・ツアーにおける〈見る〉という海棲生物との関わり方についての報告を主内容とするが、Ukkrit & Kanlayaによる論文が描き出す漁民たちによる旧来的な〈獲る〉という関わり方との比較の視点を含むものである[7]。

2．プーケットおよび近海における観光開発とリーフ漁業（reef fishery）

かつては錫の産地として知られたプーケットだが、現在ではタイを代表するビーチリゾートとして、世界の観光市場に売り出されている。急激に進む観光開発の結果、観光はプーケット県最大の産業へと躍進した。TAT（Tourism Authority of Thailand = タイ政府観光庁）の統計によれば [TAT 2009]、プーケット県の観光収入は2004年には857億バーツに達し、インド洋津波の影響により極端な落ち込みを示した2005年においても、282億バーツであった。2005年のプーケット県内総生産のうち、漁業セクターが約28億バーツと試算されている [NESDB 2010] ことから考えれば、経済規模（特に外貨獲得高）という点において、漁業は明らかに観光業の後塵を拝する形となっている[8]。

プーケット島は543km^{2}の面積を持つタイ最大の島であり、クラ地峡から400kmにわたって延びる山脈の一角であるため、その地形は全体的に高低差が激しく起伏に富み、海岸線も入り組んでいる。島の西側にはいくつもの湾が連なっているが、それらの最奥はサンゴ質の白い砂浜となっており、海水浴場として好適な地形である。プーケットの観光開発は1970年代の後半から政府主導で進められ、国際空港と大型ホテルの建設が行なわれた。1976年におけるプーケットの外国人観光客は年間で2万人程度であったとされるが [Kontogeorgopoulos 2004: 2]、2000年代になると年間300万人を超え[9]、アジアでも最も大規模なビーチリゾート複合を形成するに至っている。プーケットの観光開発は、古くからの政治経済活動の中心である県庁所在地のプーケットタウンではなく、波の穏やかなビーチが連なる島の西岸を中心に進行した。パトンビーチ、カロンビーチやカタビーチなどの南西部の各ビーチでは、大型のリ

ゾートホテルが建設されるのみならず、個人経営のゲストハウスや飲食店が乱立しての無秩序な開発が行なわれてきた [Uthoff 1997]。

南西部の海岸線で観光開発が進む一方、プーケットには豊かな自然も残されている。特に北部の海岸域と森林地帯は南西岸のような無軌道な開発から免れて、国立公園にも指定されている。北西端に位置する各ビーチは、シリナット海中国立公園として保護されており、ウミガメの産卵地としても知られる。1990年代に入って、マスツーリズム型ビーチリゾートとして発展してきたプーケットにおいても、島内外のこうした自然条件を活用する形での「エコツーリズム」が、急速に存在感を増すようになった。プーケットにおける「エコツーリズム」の草分けは、小さなボートに乗ってプーケット島の東に広がるパンガー湾に点在する奇岩を訪問するシーカヌーと、ランドローバーに乗って北部の森林地帯を走破するトレッキングである [Kontogeorgopoulos 2004: 2–5, Shepherd 2003: 137–139]。いずれも、タイ人ではなく欧米人の経営者によって創立され、すぐに多くの追従者を生み出した。現在では、それらに加えて山地部の渓流を筏で下るラフティングや本土から連れてきたゾウに乗るツアー、そして本稿が着目するダイビングなどが、「エコツーリズム」として全島の旅行代理店やホテルで販売され、人気を博している。こうした自然立脚型のツアーが「エコツーリズム」と称されるのは、多くの場合、生態系の保護や持続可能な観光実践への志向に特徴づけられるからというのではなく、マーケティングの手段としての意味合いが強い。むしろその実情は、形態としても規模としても、自然保護というエコツーリズムの理念に合致しているとは言い難い状況となっている [Shepherd 2003: 144]。プーケットの「エコツーリズム」は、観光客の興味を引くのみならず、単純な観覧ツアーに比べて単価を高く設定できるため、その市場には数多くの現地業者が参入している。

プーケットに限らずタイ領アンダマン海の全域において、沿岸に居留する漁民の一部（特にモーケン、モクレン、ウラク・ラウォイなどの少数民族）は、零細なリーフ漁業を生業としてきた。アンダマン海沿岸域では、1980年代以降に海岸線の長大な部分が次々と自然保護区（Marine National Park = 海中国立公園）に認定された。その区域内では海棲生物の捕獲採集が禁止もしくは制限されたため、リーフ漁業を行なうことができる領域は狭められていった。例えばモーケン族は、彼らの主な漁場であったスリン諸島が1981年に国立公園化されて漁撈活動が禁止されたことによって[10]、観光関連施設の従業員などへの転身を余儀なくされた。その後もシミラン諸島を筆頭として次々と海中国立公園が設置されたことについて、鈴木佑記は以下のように指摘する ――「このことは、アンダマン海域の隅々まで公的管理の網が張り巡らされたことを意味し、スリン諸島のモーケンにとっては [中略]、タイ領アンダマン海域はもはや、自由な狩猟採集活動が許される地域ではなくなった。生きていくためには観光など他の生業活動に従事する必要がでてきたのである」[鈴木 2010: 162–163]。公的な管理が強化された沿岸域において漁法、漁具、対象魚類などが制限されたことに加え、燃料費などのコストの高騰が、零細漁民たちによるリーフ漁業の衰退に拍車を掛けた。また、2004年にタイを襲ったインド洋津波の影響により船や漁具を失い、漁業収入を得ることが困難

となった者たちもいる。もちろん、自然保護区が設定されるにあたっては、収入減を恐れる漁業者と政府との間に軋轢があり、政府の側も指定区域を縮小するなどの譲歩を強いられた。結果として「海中国立公園の領域は大幅に縮小され、島の周囲の高潮線から3 km沖合までの海域に限られることになった」[秋道 2003: 244] が、その譲歩は、沖合漁業者にとっては恩恵となっても、海岸線沿いの浅場で行なわれるリーフ漁業への制限を緩和するものとは、全くなっていない。

自然保護区は、漁場としての利用が制限される一方で、その観光目的での利用が促進されてきた。自然保護区は、外国人観光客の興味を惹くための貴重な資源として扱われ、ダイビング観光を主とするワイルドライフ・ツーリズムのために、徹底的に利用されるに至ったのである。特に、パンガー県のシミラン諸島およびスリン諸島、クラビー県のピーピー諸島は、海洋観光の目的地として大々的に宣伝され、宿泊施設などが整備されるとともに、プーケットからの大型船による日帰りもしくは船内宿泊を伴う観光ツアーの目的地として、多数の観光客を受け入れるようになった。ダイビングなどのワイルドライフ・ツーリストが訪れる海域は、アンダマン海に点在する離島の沿岸域、それも通常は海岸から100mに満たない距離範囲のリーフに限定されている。自然保護区に指定された海岸線の多くの部分は、サンゴ礁や複雑な海底地形に恵まれて生物相の豊かなリーフを形成しており、観光資源としての価値が高く、実際に多くのダイバー客を惹きつけている。ダイビング観光に適した海域は、豊穣な生態系を特徴とするがゆえに、伝統的にリーフ漁業が行われてきた場所と重なることになる。自然保護区を設定し、そこにダイビング観光を誘致することは、リーフからの漁業者の締め出しと、表裏一体であった。つまり、海棲生物の利用における〈獲る〉から〈見る〉への転換が、政府の主導によって推進されたのである。

すっかり観光地と化した感のある現在のプーケット島近海域ではあるが、プーケット島沿岸および近隣の小島でのリーフ漁業は、細々と続けられている。プーケットには、2000年前後の時点で、66カ所の漁民集落があり、最大で4,131人が漁撈活動に従事していたとされる [Sampan 2008: 29]。そのうちでリーフ漁業を主たる生業とする者の割合は不明だが、雇用／被雇用関係を伴わない家族経営による漁業者数が1,256人と報告されている。リーフ漁業に専従している零細漁業者のほとんどは企業体ではなく家族経営であると想定でき、その一方で家族経営の漁業者のうちにもリーフ外で操業を行う者が存在すると考えられることから、プーケットにおけるリーフ漁業人口は1,256人を下回ると推測できる。

Ukkrit & Kanlaya による報告 [2008] は、2006年に5つの村に在住する漁民たち計63人に聞き取り調査を行い、プーケット南部海域のリーフでの漁撈の実態を明らかにした。その調査によると、主な漁場は、ラーチャーヤイ島、ラーチャーノイ島、マイトン島など、プーケット近海に点在する小島である（図－２）。このうち、ラーチャーヤイ島とラーチャーノイ島は、プーケットを起点とするダイビング・ツアーの目的地でもある（次節以降で詳述）。リーフ漁業における主な漁法は、サンゴ礁に生息する生物を対象とする度合いの順に、潜水、罠、釣り、網となっている。漁具の保有率という点からすると、罠（52%）が最も多く、釣り

糸と釣り鉤（34%）、漁網（11%）、潜水器材（2%）と続く。潜水漁においては、貝類や甲殻類（特にロブスター）と雑多な魚類を捕獲する。罠漁においては、罠は群生するサンゴの切れ目の砂泥地や岩礁の脇に開けた空間などに仕掛けられ、リーフに生息する多くの魚類が対象となる。釣りはサンゴ礁から外海まで幅広い条件下で行われ、遠海魚も底生魚も対象とされる。網漁は、操業域がプーケット島南東岸の一部に限られている。

3．プーケット近海におけるダイビング観光

不夜城として賑わうパトンビーチに象徴されるように、プーケットには買い物や食事などの非海洋性レクリエーションの施設も数多くあるが、その一番の売り物は、やはり海である。プーケットを舞台もしくは起点とする海洋性レクリエーションは、単なる海水浴や水泳にとどまらない。サーフィンやバナナボート、パラセイリングなど、ビーチを舞台としての娯楽は多岐に渡る。さらに、

図－２　プーケット南部海域

宿泊と娯楽が充実したプーケット、および近年になって開発が進みつつあるピーピー諸島やカオラックなどのビーチリゾートを拠点として、多数の観光専門ボートが広範な海域に観光客を遊覧させている。タイ領アンダマン海においては、宿泊のインフラが整った大規模ビーチリゾートが多数の客を受け入れ、30 ～ 50人乗りという比較的大型のボートを使用して日帰り（もしくは船内宿泊）ツアーを開催するという観光の方式が発達し、人里離れた孤島域の原生自然をも観光資源とした、大規模なツーリズムを成り立たせることが可能となった。

プーケットを訪れる観光客は年間400万人に上る。タイ領アンダマン海においてダイビング産業が大規模に存立している背景には、ダイバー客の潜在的な供給源としての、プーケットの巨大な観光市場がある [cf. Kontogeorgopoulos 2004: 5-6]。すなわち、ビーチリゾートでの滞在を主目的としてやってきた観光客が、結果的にダイビングという活動に流入してくるのである。ゆえにプーケットを起点とするダイビング・ツアーへの参加者は、年齢も社会的背景も多様である。同地のダイビング観光は、狭義のエコツーリズムのように限られた嗜好を持った一部の人々のみに受け入れられるのではなく、巨大な市場を持ったマスツーリズムとして成り立っている。プーケット近海を舞台とするワイルドライフ・ツーリズムは、ダイビング以外にも、釣りやスノーケリングなどが挙げられるが、スノーケリングは潜水器材を使用しないという違いはあるものの、活動域や見る対象とする生物などにおいてダイビングと重なる点が多い。ワイルドライフ・ツーリズムではあるが〈獲る〉利用に属している釣りと比較すると、経済効果という観点において、海棲生物を〈見る〉活動の規模は遥かに大きいと推測される[11]。

アンダマン海沿岸の住人にとって、魚類や甲殻類などの海棲生物は、〈獲る〉（そして食べる／売る）実践の対象であった。従って彼らにとって、観光における海棲生物の〈見る〉という利用形態の登場は、外国人によって持ち込まれた全く新しい価値観との遭遇であったといえる。現在に至るまで、タイ南部のダイビング観光は、多くの外国人の参入とノウハウを抜きにしては成り立ち得ないのが、実情である。

現地のダイビング事業者の記憶によれば、タイ領アンダマン海にダイビング活動が持ち込まれたのは1970年代にさかのぼる。観光開発が本格化する以前のプーケットの海の美しさに魅せられた外国人旅行者たちが、楽しみのためにダイビングを行ったのが、そもそもの始まりであるという[12]。1980年代になると、国際空港と宿泊施設の整備が急速に進むプーケット島において、外国人の経営による複数のダイビング・ショップが営業を開始した。その後も、ダイビング・ショップの数はプーケットを中心として増え続けている。

現在、タイでダイビング観光業を行うには、原則としてTATへの届出による登録が義務付けられている。2007年の時点において、アンダマン海沿岸を統括するTATプーケット事務所に登録されていた事業者数は、117社であった[13]。同事務所による非公式の推計では、プーケットを訪れるダイバー客は延べ人数で年間20万人を上回る（2007年現在）。その内訳のほとんどが、欧米や日本からの観光客である。それら外国人たちが、プーケットを含むタイ領アンダマン海のダイビング市場を、排他的に構成している。プーケットを訪れ

る外国人観光客が年間300万人から400万人程度であることを考えると、単純計算でその5％以上がダイビング観光に参与することになる。タイ人の観光ダイバーも近年増えつつあるとはいえ、まだその数は無視して良いほどに少ない。

ダイビング観光においては、安全管理などの問題から、顧客の母語を話すガイドとしての外国人プロフェッショナル・ダイバーへの需要が大きい。また、海中ガイドもしくはインストラクターとして活動するためには、プロダイバー資格を持っていなければならないことが、タイ人にとっての参入障壁となっている。タイのダイビング事業者は原則として、アメリカに本部を置くPADI（Professional Association of Diving Instructors）をはじめとする国際的なダイビング指導団体の傘下にある。ゆえに、タイのダイビング・ショップでプロダイバーとして働くには、そのショップが所属する指導団体による正規の訓練過程を修了し試験に合格した上で、年会費を支払い、プロとしての会員資格を維持していることが前提となる。プロダイバーとしての資格取得は、一般に数千USドルという多額の費用が必要となる上、タイ語の教材も整えられていないため、一般のタイ人にとっては容易ではない。

ダイビング観光の現場を担う人間は、ツアーにおける客の引率やダイビング・ライセンス取得講習（後述）を行うダイビング・スタッフと、客との直接の接触は持たずに主にボートの運航に関わる諸業務を行うボートクルーとに大別される（その他、オフィスの運営や経理・総務的な業務を行うスタッフもいる）。ダイビング・スタッフの大多数が、専門の訓練を受けた欧米人や日本人などの外国人であり、ほぼ例外なくタイ人であるボートクルーとは、集団として好対照をなしている。

ダイビングという活動が他のワイルドライフ・ツーリズム形態に比べて特殊なのは、客が参加するためには原則として、ダイビング指導団体の発行するライセンス[14]が必要となる点である。ライセンスを取得するには、相応の学習と訓練およびそのための金銭的・時間的費用がかかる。ライセンス取得講習は、ダイビング未経験者を対象とした、水中活動を行なうための知識と技能の教育を含んだ特別なパッケージである。プーケットでは、教科書を使用しての知識開発とプール及び海でのダイビング実技訓練とを合わせて、通常３日間で修了できるようにパッケージ化され、観光客からの人気を集めている。ライセンス取得講習は、一般的な日帰りツアーと比べると単価が高いため、ダイビング・ショップにとっては魅力的な商品である。ゆえに、プーケットを訪れる観光客の大多数を占めるダイビング未経験者に対しての、積極的な売り込みが図られている。

プーケットを起点とするダイビング・ツアーは、日帰りツアーおよびオーバーナイト・クルーズという二つの形態において行われている。通常「デイトリップ」と呼ばれる日帰りツアーは、プーケット島の南端に位置する観光船専用港であるチャロン港からボートで１～３時間ほどの距離に点在するダイビング・ポイントを訪れる（図-２を参照）。デイトリップ船が向かう方面は大まかに二つある。ひとつはプーケットから東方向のパンガー湾およびクラビーの沖合に当たる海域であり、「キングクルーザー」と呼ばれる大きな沈没船やビーチリゾートとして著名なピーピー諸島などが含まれる。もうひとつが、難易度が比較的低いために初心者や講習生にも楽しめるとしてツ

アー催行頻度の高い、プーケット南部の海域である。プーケット島の南方に浮かぶ、ラーチャーヤイ島とラーチャーノイ島には、毎日複数のダイビング・ボートが訪れ、各船につき最大50名ほどのダイバー客を、海中に案内している。

デイトリップツアーは、朝7時半頃から昼下がりもしくは夕刻まで、ほぼ半日がかりの活動である。ガイド付きのダイビング活動に加えて、宿泊施設への送迎、ボートでの往復移動、朝食・昼食・間食が、パッケージに含まれる。朝8時から9時にかけてのチャロン港は、各社のダイバー客とガイドが一堂に会するため、さながらラッシュアワーの様相を呈している。桟橋の突端には、文字通り隙間なくダイビング船が係留されており、港にやってきた客たちはバスによるピストン輸送で次々に船へと送り込まれる。プーケットの日帰りダイビング観光に使用されるボートは、30～50人乗りという大型のダイビング専用船である。目的地までが遠いため、1～3時間という移動時間も快適に過ごせるように、充分な居住空間の確保に加えて、果物や飲み物の無料提供、さらに新型の船では冷房付きの室内スペースを設置するといった工夫がなされている。客が支払うダイビング料金は、こうしたコストをすべて含んでいるため、プーケットが提供する多くの観光アクティビティと比較して、安くはない。通常、ダイビング2本[15]のデイトリップの料金は、3,000バーツから4,000バーツである。プーケット南部海域へのツアーは料金が比較的安く、ピーピー諸島などの遠方まで足を伸ばすと、距離に大まかに応じて高額となる。参加者が自前のダイビング器材を用意していない場合は、レンタル器材料金が追加される（フルレンタルで1,000バーツ程度）。デイトリップでは通常、午前と午後に分けての計2本もしくは3本のダイビングが行われる。ダイビングの直前にはガイドが客に、ポイントの地形や安全上の注意、そして潜水中に見られるだろう生物についての説明を行う。水中では、ガイドは自分が担当する客の安全管理を行うともに、価値があるとされている生物をいち早く見つけては、客にその所在を教えていく。その日の最終のダイビングを終えると、港に戻るまでの帰路、船上では客がガイドを囲んで、ダイビングをいかに行い水中でどのような生物が見られたのかをノートに記録する、「ログ付け」と呼ばれる作業が行われる。

4．〈見る〉資源としての海棲生物

ダイビング観光に訪れる客の目的のひとつとなっているのが、海棲生物との出会いである。ダイバー客は、旅行に先だって、美しい海棲生物の写真が紙面を飾るダイビング雑誌やウェブサイトなどで情報収集をする。また、ダイビング業者の側にとっても、自社の主催するツアーにおいてどのような生物が見られるのかを明らかにすることが、マーケティング上の重要な手段となっている。現在、プーケットの多くのダイビング・ショップは、スタッフが海中で撮影した写真を載せるブログという形で、日々のツアーにおいてどんな生物が見られたのかを、詳細に報告している。ダイバー客たちは、そのような事前情報を得た上で、美しく珍しい海棲生物に出会うことを期待して、プーケットにやってくるのである。ダイビング経験の豊富な客は、具体的な目当ての海棲生物との出会いを求める傾向が強い。ライセンスを持っていても経験の少ない客やダイビング未経験の客で

あっても、写真・テレビ・映画などによって紹介される豊かな生態系のイメージを実際に目の当たりにすることを期待して、ダイビング・ツアーに参加する。ダイビング・ガイドの側も、そうした事情は十分に承知しており、客を楽しませるために、意識して価値ある生物を見せようとする。つまり、ダイビング・ガイドという仕事においては、海棲生物を見つける（そして見せる）という作業が、極めて大きな比重を占めているのだ。

ワイルドライフ・ツーリズムで〈見る〉対象として求められるのは一般に、形態や色合いの美しい生物、希少な生物、大きな生物、大規模な群れなどである。その傾向はタイ領アンダマン海のダイビング観光においても同様であり、同海域で見ることのできる最も大きな生物であるジンベエザメとオニイトマキエイ（俗称マンタ）は、ダイバーたちのあこがれとなっている[16]。トラフザメやネムリブカといったサメ類、ロウニンアジやオニカマスといった大型の魚類が、人気としてはそれに続く。個体の大きさとしては特筆すべきものはないが、多数の個体が密集した群れを形作るアジ、カマス、フエダイなどの類は、その密集する群れが重要な見物とされている。また、数cm程度の小さな生物であっても、色合いや形が美しいとされる生物は、やはり重要な観光資源である。風変わりな形態を特徴とするニシキフウライウオ、カエルアンコウ、タツノオトシゴなどは、他の魚類と比較して個体数も出遭う確率も少なく、ほんの数匹の個体を、多くのダイバーが入れ替わり立ち替わり観察することになる。熱帯魚と言うと一般に想像されるであろう、華やかな色彩のチョウチョウウオやヤッコ類は、サンゴ礁域においてはありふれた魚であるが、南海のリゾートを楽しむという状況の彩りとして、ダイバーたちには歓迎されている。その一方で、サンゴ礁の切れ目の砂地でよく見かけるヒメジ類などは、地味で面白みのない対象とされているようで、ほとんど注目を集めることはない。

プーケット近海のデイトリップツアーでは、1日に2本から3本のダイビングが行なわれる。1本のダイビング時間（潜水開始から浮上まで）は、潜水深度、海況、客の熟練度などにもよるが、おおむね40分から60分の間である。潜水中は、1人のガイドが最大5名程度の客を引率する。ガイドはグループの先頭に立ってリーフの中をゆっくりと泳いで場所を移していくが、1本のダイビングでの水中移動距離は、よほど強い潮流に流されない限りは、1kmに遠く及ばない程度にすぎない。そのゆっくりした移動のなかで、ガイドは次から次へと、魚類や甲殻類を見つけては、客に紹介していく。ガイドは「差し棒」と呼ばれる金属製の棒を持っており、その棒を使って目当ての生物がいる位置を指示する。また、背負ったアルミ製の空気タンクを叩いて、その音で客の注意を引きつけることもある（水中では会話ができないため）。日本人ガイドの多くは、水中で筆談による意思疎通を行なうための磁気ボードを持っており、生物を指し示すたびに、その種名を書き記して客に見せる。

ラーチャーヤイ・ラーチャーノイ両島沿岸の多くの部分が、ダイビング観光活動の舞台となっている。ダイビング・ポイントは、砂地にサンゴと岩礁が点在する小さな湾内、枝サンゴとテーブルサンゴが密集するサンゴ礁、ごつごつした大きな岩が集積する岩場、などに大別される。ダイビングでの最大深度が30mを超えることは、稀である。

両島沿岸のほとんどのポイントでは、水深25mを超えるとリーフの外に出てしまい、特に見るべきものも無くなってしまう。ポイント毎の地形条件と、それに応じて棲息する生物種が異なっているので、1日に2回から3回のダイビングを同じ島の沿岸で行なっても、それぞれを別個の体験として演出することができる。

Ukkrit & Kanlaya [2008: 288] の報告によれば、プーケット島南部海域のリーフに棲息する多数の魚類のうちでも、多く獲られる種とそうでない種がある。彼らの論文から転載した表－1は、種別ではなく科・属レベルの分類による整理ではあるが、どのような魚が多く漁獲されているのかが、明らかにされている。このような魚種別の偏差は、必ずしもリーフに棲息する魚類の個体数やバイオマス量と比例するものではない。また、厳密な意味でのリーフの内部のみで行なわれたのではない漁撈の結果も含んでいるため、特に釣りに関しては外洋性の魚の出現率が高くなっていると考えられる。それでも傾向としては、食用や加工用として高い価値が置かれるものや、技術的に捕獲しやすいものが、漁獲高の中心となっていることがはっきりと読み取れる。捕獲量の多いgrouper（ハタ類）、emperor（フエフキダイ類）、snapper（フエダイ類）などは、タイでは食用として人気が高く、プーケットの魚市場や海鮮料理店などでも良く見かける[17]。その一方で、parrotfish（ブダイ類）、rabbitfish（アイゴ類）、fusiler（タカサゴ類）、surgeonfish（ハギ類）などは、リーフに棲息する個体数は多いにもかかわらず、漁獲高としては貧弱である。サンゴ礁において最も月並みな魚であるチョウチョウウオ類や、個体は小さいが生息数においては群を抜くと思われるスズメダイ類などは、全く捕獲されていない。

表－1　プーケット南部海域での釣りと罠による漁撈において捕獲された魚類（聞き取り調査による）

英語名	日本語名	釣り		罠	
		出漁毎の出現率	漁獲高に占める割合*	出漁毎の出現率	漁獲高に占める割合*
Groupers	ハタ	49.4%	20.3%	90.9%	26.2%
Emperors	フエフキダイ	88.2%	27.8%	39.4%	6.7%
Snappers	フエダイ	55.9%	6.5%	69.7%	13.6%
Jacks and Trevallies	アジ	45.6%	17.4%	54.5%	22.2%
Threadfin breams	イトヨリダイ	29.4%	10.5%		
Tunas and Mackerels	マグロ／サバ	23.5%	4.9%	3.0%	1.0%
Grunts and Sweetlips	イサキ／コショウダイ	8.8%	1.4%	21.2%	7.5%
Barracudas	カマス	7.4%	1.0%	3.0%	0.3%
Stingrays	エイ	5.9%	3.4%	6.1%	0.7%
Cobia	スギ	5.9%	2.0%	3.0%	0.7%
Parrotfishes	ブダイ			12.1%	2.4%
Rabbitfishes	アイゴ			9.1%	7.3%
Triggerfishes	モンガラカワハギ			3.0%	5.8%
Fusiliers	タカサゴ			3.0%	3.6%
Surgeonfishes	ハギ			3.0%	1.2%
Threadfins	ツバメコノシロ			3.0%	0.4%

＊漁獲量の単位として「バイオマス」が使用されているが、どのように計測したのかは不明である。おそらくは重量とほぼ同義だと思われる。
Ukkrit & Kanlaya［2008: 288］より転載

ダイビング観光においてガイドがどの生物を客に紹介するかは、リーフ漁業の場合と同様に、生息数や遭遇頻度に単純に比例対応しているわけではない。リーフ漁業において重要度の高い、ハタ、フエダイ、フエフキダイなどは、よほど大きい個体であったり、群れを作っていたりといったことがない限り、あまり注意を向けられることはない。その逆に、漁業においては顧みられることのない、チョウチョウウオやスズメダイなどが、ダイビング観光においては比較的注目度が高い。すなわち、ダイビング観光の資源という意味では、漁業的には価値のない魚のほうがむしろ重要だということになる。〈見る〉という文脈においてダイビング観光資源として利用される魚は、Ukkrit & Kanlaya [2008] が報告するリーフ漁業の事例と比較すると、遥かに多岐に渡る。どちらかと言えば初心者向きのポイントとされ、さほどの生物多様性は望めないとみなされているラーチャーヤイ・ラーチャーノイ両島に限って考えた場合でも、漁獲物としては価値を持たないであろう魚種も含めた多種多様な生物が、恒常的に水中で観賞されている（表－2）。

表－2は、2006年11月に筆者が同行した、ラーチャーヤイ島およびラーチャーノイ島でのダイビング（計16本）において、ガイドが客に紹介した魚類の一覧である（甲殻類やウミウシなどは除く）。これは、実際に海中で視野に入った無数の魚の全てでは当然なく、潜水終了後の「ログ付け」においてガイドが「今日のダイビングで見た魚」として特に言及した魚種に限られる。両島のダイビングで見られる（そしてガイドが紹介する）魚種の総体は、ここで挙げるよりも遥かに多い。このデータは、筆者が調査をしたダイビング・ショップ１社のツアーに限定された短期間のものであるため、プーケットのダイビング観光全体にそのまま当てはまるわけではないが、大まかな傾向は表し得ていると考える。「ログ付け」において言及される魚はすなわち、ガイドや客が、水中で目に入る多数の魚のうちでも特に「見た」と記憶しているものである。それらは、何らかの理由で高い価値があると徴付けされているがゆえに、とりわけて記憶され言及される。

表－1と表－2とは、集計方法が異なるために単純な対比はできないが、それでも一見して読み取れるのは、ダイビングにおいて〈見る〉資源とされている魚の多様性である。アジ、カマス、ハタといった食用に適した大型の魚に加えて、スズメダイやチョウチョウウオなどの漁業資源としてはほとんど価値を置かれていない（ゆえに表-1には登場しない）魚が、表－2には数多く含まれている。

食用として利用する上では、個体の大きさなどによって、利用しづらい魚とそうでない魚が生じる。サンゴ礁域に生息する魚種の大半は、小型なうえに多くの漁獲数も見込めないため、〈獲る〉という利用の対象とはならない。表－2に挙げられた魚から例を取れば、クマノミやチンアナゴなどは、漁獲対象としてはほぼ無価値であるが[18]、ダイビング観光においては、重要な資源としての価値が付与されている。その大きな理由は、外観や生態が個性的であり、同時に潜水による観察が容易だからである。リーフに生息する、漁民たちが見向きもしなかったような有象無象の生物に、食用というくびきから離れた様々な文脈において意味付けをし、それを資源として観光客を呼び寄せるというのは、〈見る〉という利用を通じての

表-２　ラーチャーヤイ島・ラーチャーノイ島のダイビングにおいて見られた魚種

分類	名称
チョウチョウウオ科	コラーレバタフライフィッシュ（通称）
	フウライチョウチョウウオ
	インディアンバガボンド（英名）
	アンダマンバタフライフィッシュ（英名）
	スポッテドバタフライフィッシュ（英名）
	ハタタテダイ
ツノダシ科	ツノダシ
キンチャクダイ科	タテジマキンチャクダイ
	ワヌケヤッコ
	アデヤッコ
スズメダイ科	ヤマブキスズメダイ（幼魚）
	デバスズメダイ
	クジャクスズメダイ
	ミツボシクロスズメダイ
	スカンクアネモネフィッシュ（英名）
	カクレクマノミ
	クマノミ
ニザダイ科	ナンヨウハギ
	パウダーブルーサージョンフィッシュ（英名）
テンジクダイ科	スカシテンジクダイ
ベラ科	テンス（幼魚）
イソギンポ科	フタイロカエルウオ
イサキ科	チョウチョウコショウダイ（幼魚）
	ムスジコショウダイ
ハタ科	アカマダラハタ
	ユカタハタ
	キンギョハナダイ
ハタンポ科	ミナミハタンポ
	キンメモドキ
マンジュウダイ科	ツバメウオ
モンガラカワハギ科	キヘリモンガラ
	ゴマモンガラ
フエダイ科	キン センフエダイ
	ヨスジフエダイ
	ホソフエダイ
タカサゴ科	イエローバンドフュージラー（英名）
	イエローバックフュージラー（英名）
	ウメイロモドキ
アジ科	カスミアジ
	ツムブリ
カマス科	オニカマス
	タイワンカマス
ヘラヤガラ科	ヘラヤガラ
ヤガラ科	アオヤガラ
ハリセンボン科	ヒトヅラハリセンボン
	ハリセンボン
フグ科	モヨウフグ
ハコフグ科	クロハコフグ
	ミナミハコフグ（幼魚）
フサカサゴ科	ネッタイミノカサゴ
	ハナミノカサゴ
	オニカサゴ
ヒメジ科	アカヒメジ
ウツボ科	ドクウツボ
	ヘリゴイシウツボ
アナゴ科	チンアナゴ
ハゼ科	ヒレナガネジリンボウ
	ハタタテサンカクハゼ
	ヤノダテハゼ
カレイ目	ミナミウシノシタ
	モンダルマガレイ
ヨウジウオ科	ワカヨウジ
アカエイ科	ヤッコエイ

＊2006年11月の筆者のフィールドノートによる

新たな価値創出であり、人間がリーフに見いだす意義の刷新なのである。

ダイビング観光における〈見る〉資源としての海棲生物の価値は、幅広く多様であるのみならず、可変的でもあることを特徴とする。もちろん、本節の冒頭で紹介したような、常に高い人気を保持している「定番の」魚種は存在しているが、その一方で、特別な興味の対象ではなかった魚が、なんらかのきっかけによって、ダイバーたちにとって魅力のある魚として捉え直されるという動きも、頻繁に生じている。既にダイバーたちが持っている、ある種の魚に対しては大きな魅力を感じるが、別の魚についてはそうではないといった認識の構造は、無徴の魚にガイドが何らかの仕方で意味を与えてやることで、比較的容易に変化させ得る。

エコツーリズムの実務において「インタープリテーション」と呼ばれるのは、まさにそうした役割である [cf. Fennell 1999: 127–129]。インタープリターの活動には、自然についての解説のみならず、ツアー客に自然との触れ合いへの積極的な参加を促し、自然観の変革を導くという、教育的な側面が含まれる。例えば、一見したところ何の変哲もない魚が、実は他の海では見ることのできない固有種であるとガイドに教えられれば、ダイバーたちはその魚を見ることへの意義を見いだすようになる。ラーチャーヤイ・ラーチャーノイの両島でも恒常的に観察できる例としては、白地に黒い一本の横線が特徴的なスズメダイの「インディアン・ダッシラス」[19] や、黒っぽい地味な体色をしたチョウチョウウオの「コラーレバタフライフィッシュ」[20] などが、挙げられる。どちらの魚も、プーケット近海のリーフで潜るとほぼ毎回見かけるが、近縁の魚種と比較して特に目を引くような外見上の特徴はないため、多くのダイバーたちはその存在を取り立てて意識することはない。しかし、潜水前にガイドが、それがインド洋の固有種であって沖縄やグアムなど日本人に身近な太平洋のダイビング・ポイントでは見られないことを指摘し、海中でその存在を指し示してやると、ダイバーたちは持ち込んだカメラを向けて写真を撮り始めるのである。

ダイビング・ガイドたちは特に、ある種の魚の生息数が少なく滅多に見ることができないという希少性に関して、極めて敏感である。稀少な魚と遭遇した際には、彼らはその場所や深度その他の条件を記憶するべく努力する。そして、同じリーフを潜る次の機会にそのポイントを再訪するのみならず、ガイド同士のネットワークを通じて情報を広めていく。ゆえに、生息数と遭遇機会が少ない魚種であるほど、特定の個体の棲息状況についての情報蓄積は増大し、共有の度合いも高まる。その結果、生息数が少なく生息域も限定される魚種が、生息数の多い魚種よりも客に紹介される頻度が高くなるという、一種の逆転現象が生じることもある。アクセス可能な資源量の豊富さが経済価値の主要な源泉となる〈獲る〉利用法に対して、〈見る〉利用法においては、資源の寡少さを大きな経済的価値へと転じることができるのである[21]。

5．おわりに：〈獲る〉海と〈見る〉海の断絶

リーフを生活と就業の場として生きる人々に向ける従来の研究のまなざしは、彼らと海棲生物との関わりを、獲る者と獲られる者との関係として

しか捉えてこなかった。なかんずく、人類学者に代表される、海岸域や島嶼部に多数存在してきた伝統的な小社会を対象とした研究者たちは、それらの社会が海を生活の場とすることによって、農耕社会や牧畜社会とは異なる独自の特質を育んできたと見なした。そして、そこでの主要な生産手段である漁撈こそが、住人たちと海との関わりを体現すると考えたがゆえに、漁業という活動は、地域研究者による格好の分析対象となってきた。地先の海に生活の基盤をおく人々と「海とのかかわりは、具体的な漁撈・採集活動を通じて実現される」[秋道・田和 1998: 2] という視座に立ち、「海への認識や活動の戦略、獲得される海洋生物の利用と価値、海を媒介とした交渉史」[秋道 1995: 3] を明らかにすることを通じて、「海人」としての彼らの描写がなされてきたのである。漁業という形での海棲生物利用へのそのような視角は、しかしながら、海に生きる人びとが現実に資源を利用する上での、新たな方途を見逃してきた。

本稿が試みたのは、タイ領アンダマン海における、ワイルドライフ・ツーリズムという形での海棲生物を〈見る〉利用の実態を、描き出す作業であった。その結果として、海中の魚を〈見る〉実践が、従来的な〈獲る〉実践の延長にあるのではないことが、浮き彫りになった。海棲生物の〈獲る〉利用と〈見る〉利用とは、同じリーフを舞台として行われたとしても、大きく様相を異にする。そこから読み取れるのは、アンダマン海の海棲生物資源利用の伝統における、大きな断絶の存在である。

アンダマン海のダイビング観光を築き上げ拡大してきた主役は、外国人である。もちろん、タイ人の労働力と資本なくしては今日に至るダイビング産業の発展は困難であっただろうが、それはあくまでも量的な拡大を支えるリソースの問題である。〈獲る〉から〈見る〉へという質的な転換を担う中心となったのは、欧米や日本から流入してきた外国人に他ならない。海棲生物の〈獲る〉利用から〈見る〉利用への転換は、資源の直接の利用者における、タイ人から外国人への交代でもあったのだ。アンダマン海の海棲生物を〈見る〉者が、観光サービスの提供者としても購買者としても、タイ人ではなく外国人であるという基本図式は、現在に至るまで継続している。

観光業へと転身する漁民は少なくないが、彼らにとって、ダイビング観光において〈見る〉サービスを提供する職を得ることは難しい。アンダマン海を股に掛けて活躍し、海棲生物についての知識も豊富であるはずの彼らが、なぜダイビング観光のガイドへと転身できないのだろうか？ もちろん、外国人ツーリスト相手の接客に必要な語学力が貧弱であるという理由も大きい。しかし、それ以前のより根本的な理由が、前節の記述から明らかである。つまり、〈獲る〉利用と〈見る〉利用においては、求められる知識と技能の質が異なるのだ。漁業者としてリーフに精通していることは、必ずしも良きダイビング・ガイドであることを意味しない。特に、海棲生物の〈見る〉資源としての価値の創造という局面においては、リーフ漁業者として保持してきた価値観は、有用であるどころか、放棄し更新することが求められる。リーフ漁民が、同じリーフを舞台とするダイビング・ガイドになろうとするなら、全く新しい知識と技能の体系（そして資格）を身に付けなければならない。リーフ漁業者としての知識と経験は、もちろんダイビング・ガイドの実践においても様々な形

で応用が可能だが、それはあくまでも、ダイビングに関する十分な学習を終えた上での話となる。

タイ領アンダマン海におけるリーフ漁業とダイビング観光とは、地理的領域と対象資源が重なり合うにもかかわらず、その担い手においても、活動の特質においても、動員される知識と技能においても、大きく断絶している。このことは、漁業の延長で語るのではない、〈見る〉資源利用をめぐる新たな議論のアリーナを切り拓く必要性を示唆する。かつては〈獲る〉海だったタイのリーフが〈見る〉海へと変貌していくなかで、海棲生物は観光資源となり、漁業資源とは異なる性質を持つ存在として立ち現れている。海棲生物の観光利用は、漁業とは異質の産業構造をもたらし、資源をめぐるポリティクスは、新たな利害関係者の相関図のもとに刷新されつつある。そうした変化22）の実態を明らかにすることは、タイの「海人」研究の今後における重要な課題であろう。

【注】

1）本稿では、産業としての総体を念頭に置くときは漁業、漁獲を得る一連の作業を念頭に置くときは漁撈という語を、それぞれ使用する。

2）ただし、「観光／レクリエーション」の内訳は明示されていない。リーフの観光利用には様々な形態があり得るため、ワイルドライフ・ツーリズムによる利用はそのうちの一部を占めるにすぎないが、漁業に比して決して経済規模は小さくないということの傍証にはなるだろう。

3）観光活動としての釣りも行われているが、リーフ・フィッシングよりも外洋のトローリングが主流である。ビーチ以外の海で展開される観光活動としてはシーカヌーも挙げられるが、その活動場所としてとりわけてリーフが選択されるわけではない。

4）ワイルドライフ・ツーリズムという概念には釣りや狩猟なども含まれるが、持続可能な観光開発が叫ばれる風潮のなかで、「野生生物にやさしい（wildlife friendly）」という看板を掲げる〈見る〉観光形態（wildlife watching tourism）が主流となり規模を拡大している [Tapper 2006]。

5）これらの島は、日本人を対象とする観光パンフレットなどでは一般に「ラチャヤイ」「ラチャノイ」として標記される。そのほかにも、タイ語の長母音が含まれる地名を標記する際に長音符号を用いないケースは多い（「ピピ島」など）。

6）筆者は、2006年4月から2007年5月、および2007年11月から2008年3月までの期間、プーケットのパトンビーチに滞在し、ダイビング観光の実態を調査した。調査活動は、2隻のダイビング専用船を所有する大手のダイビング・ショップのひとつである「マリンプロジェクト」プーケット店に常勤スタッフとして所属し、日々の業務に従事しながら行なわれた。

7）筆者が本稿で言及するのはラーチャーヤイ・ラーチャーノイ両島沿岸域に限定されるのに対し、Ukkrit & Kanlayaの報告が対象とするのは、両島以外の複数の小島を含むより広い海域である。ゆえに厳密な意味での比較とは言えないが、大まかな傾向を把握するのには問題ないと考える。

8）ただし、漁業生産物の一部は、観光客向けの海鮮料理屋などに出荷され、観光収入獲得の一翼を担っている。

9）TAT [2009] の統計による。ただし、インド洋津波直後の2005年には年間130万人程度まで激減した。

10）鈴木佑記 [2010: 169-171] によれば、モーケンによるスリン諸島での居住や資源利用に対する政府による管理は、国立公園法の厳格な適用においてではなく、彼らの慣習や生活実態を勘案した弾力的な解釈においてなされている。結果として、モーケンによるスリン諸島での生活に必要な最低限の漁は黙認されている。とはいえ、漁撈のみで1年の生計をすべてまかなうまでには至っておらず、観光施設などでの賃労働に従事している。

11）パトンなどのビーチエリアにおいては、ダイビング・ショップは乱立していると言って良いほど多いのに対して、フィッシング・ツアー業者は目立たない。また、プーケットを訪れる大多数のマスツーリストたちにとっては、ダイビングの方がより抵抗なく参加できるオプションであるようだ。

12）1980年代からプーケットで事業を展開する、ダイビング・ショップのオーナーの証言による。

13）この数字には、ダイビング船を所有する業者に加えて、乗合船のみを利用する業者も含む。加えて未登

録の業者も少なからず存在するため、実際に活動する事業者の実数は、さらに多くなる。

14）ダイビングのライセンスと一般に言われるものは、PADIをはじめとする特定の指導団体の認定によるものであり、法律によって認められた公的資格ではない。

15）ダイビングの回数を日本語では慣習的に「本」と数え、英語では“dive”が単位となる。タイのダイビング観光の現場では、タイ人たちも、英語の単位である“dive”をそのまま流用している。

16）アンダマン海域でジンベエザメやマンタが見られる確率は年々減少していると、現地のガイドたちは口をそろえる。また、アンダマン海の一部にはジュゴンも棲息するが、通常のダイビング観光では見ることはできない。現在、ジュゴンが棲息するトラン県においてもダイビング観光開発が進められているが、もしもジュゴンを見られるダイビング・ツアーの設計が可能であれば、ジュゴンはジンベエザメと並んで最大の売り物となるだろう。

17）ただし、養殖魚である場合も多い。

18）近年、飼育用として販売するために野生のクマノミを捕獲することが世界各地で横行している。水槽に入れて飼うというのも、生物の〈見る〉利用の一形態であるが、一般的なワイルドライフ・ツーリズムの実践とは相容れないため、本稿では立ち入っての考察は行なわない。

19）フタスジリュウキュウスズメダイのインド洋亜種として、一般に説明されている。対応する日本名は無いため、日本人ガイドたちも英名をベースとした呼称を使用している。

20）その外観から、white collar butterflyfishもしくはredtail butterflyfishという英名がつけられている。日本においては、一部の図鑑がchaetodon collareという学名にもとづく「コラーレバタフライフィッシュ」という独自の通称で紹介している。

21）アンダマン海の漁業においては、中国で珍重されるナマコやタツノオトシゴなどの特殊海産物が、希少性を市場価値に転じた一例であろう。

22）その変化には、ボートクルーとしてではなくガイドとしてダイビング観光に参与するタイ人の数が急速に増しつつあるという、インド洋津波後の事情も含まれる。

【参考文献】

秋道智彌　2002.「紛争の海：水産資源管理の人類学的課題と展望」秋道智彌・岸上伸啓（編）『紛争の海：水産資源管理の人類学』pp.9-36, 京都：人文書院.

秋道智彌　2003.「野生生物の保護政策と地域社会：アジアにおけるチョウとジュゴン」池谷和信（編）『地球環境問題の人類学：自然資源へのヒューマンインパクト』pp.230-250, 京都：世界思想社.

秋道智彌・田和正孝　1998.『海人たちの自然誌：アジア・太平洋における海の資源利用』西宮：関西学院大学出版会.

Fennell, D. A. 1999. *Ecotourism: An introduction*, London: Routledge.

Kontogeorgopoulos, N. 2004. "Ecotourism and mass tourism in Southern Thailand: Spatial interdependence, structural connections, and staged authenticity," *GeoJournal*, vol.61, pp.1-11.

NESDB (National Economic and Social Development Board). 2010.（http://www.nesdb.go.th/econSocial/macro/gpp_data/index.html 2010年5月6日参照）

Newsome, D., Dowling, R. K., Moore, S. A., Bentrupperbaumer, J., Calver, M. and Rodger, K. 2005. *Wildlife tourism*, Clevedon: Channel View.

PADI. 2009. PADI Statistics（http://www.padi.com/scuba/about-padi/PADI-statistics/default.aspx 2009年10月9日参照）

Sampan Panjarat. 2008. *Sustainable fisheries in the Andman Sea coast of Thailand*, New York: Division for Ocean Affairs and the Law of the Sea Office of Legal Affairs, the United Nations.

Shepherd, N. 2003. "How ecotourism can go wrong: The cases of SeaConoe and Siam Safari, Thailand," Luck, M. and Kirstges, T. (eds.), *Global ecotourism policies and case studies: Perspectives and constraints*, pp.137-146, Clevedon: Channel View Publications.

鈴木佑記　2010.「『悪い家屋』に住む：タイ・スリン諸島モーケン村落の動態」林勲（編著）『自然災害と復興支援（みんぱく実践人類学シリーズ9）』pp.155-180, 東京：明石書店.

Tapper, R. 2006. *Wildlife watching tourism: A study on the benefits and risks of a fast growing tourism activity and its impacts on species*, Bonn: UNEP/CMS Secretariat.

TAT (Tourism Authority of Thailand). 2009. Tourism Statistics in Thailand（http://www2.tat.or.th/stat/web/static_index.php 2009年10月8日参照）

Udomsak Seenprachawong. 2001. "An economic analysis of coral reefs in the Andaman Sea of Thailand," Economy and Environment Program for Southeast Asia website (http://www.idrc.ca).

Ukkrit Satapoomin and Kanlaya Chawanon. 2008. "The small-scale reef fishery at Phuket Island, Thailand Andman Sea coast," Obura, D. O., Tamelander, J. and Linden, O., eds., *Ten years after bleaching: Facing the consequences of climate change in the Indian Ocean (CORDIO status report 2008)*, pp.285−291, Mombasa: CORDIO.

Uthoff, D. 1997. "Out of the tin crisis into the tourism boom: The transformation of the tropical island of Phuket by international tourism," *Applied Geography and Development*, vol.49, pp.7−31.

WWFジャパン 2003.『サンゴ礁の世界的な衰退による経済への影響』東京：WWFジャパン.